
memory × melody

四葉の奏でる幻想曲(ミステリー)

朔良梨里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

memory x melody 四葉の奏でる幻想曲^{ミステリー}

【Nコード】

N1428F

【作者名】

朔良梨里

【あらすじ】

記憶を失くした少女・綾。彼女の元に残ったものは、四葉のクロバーをかたどった鍵と、ひとつの旋律。退屈な日常を送っていた彼女の前に突如現れた転校生。それをきっかけに、止まっていた時間が動き始める。巻き起こる不可解な事件。変化していく気持ち。そして 学園恋愛みすてりい、開幕！

memory x melody - 序曲 -

序曲

目が覚めた

此処は何処だろう

一面真っ白な部屋

それよりも・・・私は誰だろう

何も思い出せない

でも、何か切ない気持ちが残っている

私の元にあるのは

四つ葉のクローバーをかたどった鍵と

一つのメロディ

ただ、それだけ

私はどうすればいいのだろう

この消失感を抱えたまま…

ただ愛されたかった

抱きしめてほしかった

心のどこかで

つながっていられたら

それだけで

ただ、それだけでよかった

でも、私は

誰からも愛されていない

一人ぼっち

愛してくれるはずの人にも・・・

だから

わたしは

第一楽章 1

第一楽章

蒼い空。

木々の間から差し込む光。

自然のささやき。

そして。

キンコンカンコン

終業のチャイムが鳴り響き、長い長い退屈な授業が終わった。

ざわめきが広がり、話し声、笑い声が聞こえる。

すでに校舎から飛び出している生徒もいる。

ある教室では、窓辺の席に座っている少女が、空を眺めている。

退屈だ、と言いたげな表情で。

此処は四葉学園。

比較的大きな私立の学校だ。

初等部、中等部、高等部があり、いろいろな設備が整っている。

少し離れた所には寮もある。

生徒数も多く、部やクラブもたくさんある。

これだけ大きな学校だから、授業料はとても高そうに思えるが、実は意外と安かったりする。

お金持ちでなくても普通に通えるし、実際、一般庶民の割合はとても高い。

もちろん、ちらほらお金持ちがいたりするのだけど。

なんでも、初代学園長様がとてもお金持ちだとかで、ボランティア感覚で創ったそうだ。

恐ろしい金銭感覚。

まあ、そのおかげで私はこうして此処にいることができるのだけど。

そして、この学園では、家のない人、家族をなくした人 事情を抱え、一人になってしまった人も受け入れてくれる。

なんと奨学金まで出してくれるのだ。
学園内には心理カウンセラーもいる。

そう。

私 神守綾も、その中の一人。

普通だったら高校に入るための準備をする春休みに、此処に来た。それから二ヶ月たった。

すっかり退屈で平和な日々慣れてしまった。

何も望むものはない。

あ、でも一つだけ。

真実を。

窓の外を眺めていると、

「えー、これで本日の授業を終わる」

起立、という号令がかかった。

はっとして、あわてて席を立つ。

学級委員が、礼、と言い、ようやくこのクラスの授業も終わった。
「さて、と」

もうクラスメートのほとんどは、すでに帰る準備を始めているようだった。

いくつかの机は空っぽだ。

そりゃそうだ。

誰でもとっとと遊びに行ったり、部活に行きたいだろう。

私も片付けないと。

鞆を取りに、席を立ち、後ろのロッカーに行く。

さすがだ。

教室の設備も整っていて、このロッカーも使いやすい。

いつ見ても、教室は綺麗だし。

「でさー、あの時ね」

「ええっ。そうなんだあ」

「そうそう。あと あっ」

席に戻る途中、誰かの肩にぶつかった。

「あ、ごめんねえ」

「こちらこそごめん」

相手が謝ってきたので、一応返しておく。

ぶつかってきた女の子は少し顔をしかめながらも、再び話し始めた。

「……………あ、でさ」

私は早足で自分の席へと戻り、椅子に座った。

「ふう……………」

前髪をかきあげ、窓の外空を見る。

あれから二ヶ月たった今、この学園に慣れたものの、友達といえるような人はいない。

それはこの学園になじめてないということかもしれないが。

……………まあいいや。

私自身が周りを拒絶しているのかもしれないし。

別に同情をしてもらいたいわけでもない。

無理に誰かのためにわざわざ話をあわせたくないし、構ってもらいたいわけでもない。

今の私はそう思う。

一人になつた日からそう思い始めた。

”前”の私はどうだったのだろう。

ふと時計を見る。

「あ……。いけないいけない」

気がつけば、思っていたよりも時計の針が進んでいた。

早くしないと”アイツ”が来てしまう。

あまり話さないクラスメイトでさえ鬱陶しいのに、アイツなんて体を起こし、机の中のを鞆の中に詰め込む。

そのとき。

「ん？なんだこれ」

どうも教科書が入りにくい。

鞆の奥に何かが入っているようだ。

自分としては何も入れたつもりはなかったんだけど。

どうせだから鞆をひっくり返してみる。

「つと……。何これ……」

鞆の奥から出てきたものは……此処にあるのがおかしいものだ。

つーか、何であるんだ？

それは私をデフォルメしたような、小さくて（何故か）フリフリ
のワンピースを着せられたお人形だった。

しかも手作りっぽい。

妙に上手いし。

「アイツか……。うん、地獄行き決定」

心なしか周りがざわついている。

「ねえ……。あれって……。神守さんだよ……」

「どう見てもそうでしょ。あれって神守さんが作ったのかなあ」

「でも、そんなキャラじゃないっしょ」

「だねーっ」

ウザい。

バンツ、という音を立てて思いっきり立ち上がる。

カチン。

教室の時間が止まった。

そんな中、遠くから大きな声が聞こえた。

来た。

「あーやーや〜んっ」

……来てしまった。

バシツという、さっきの音にも引けをとらない大きな音とともに、空気の読めていないやつ約一名が教室の中に入ってきた。

「あーやーっ！今日も迎えに来たぜっ」

回転したあと、ビシツと私に指を指す。

ここからはいつものパターンなので、教室の時間が動き出す。

「なんだ……。やつぱりあいつかよ」

「そんなら心配ないねーっ。じゃあ帰ろっか」

「そ、そうだね」

「じゃあ、また明日！」

そして教室はあっという間に空っぽに。

……そこだけ慣れないでくれ。

まったく空気をぶち壊したというか、してくれたというか……。

その張本人は、何を取り違えたのか、

「お！みんなは俺達のために気を利かせてくれたのか。うれしいな
っ
っ」

という、とても気に障る言葉を発しながら、カツカツと近づいてくる。

そしていきなり走り出して、私に飛びついてきた。

「会いたかったよ〜っ。あやや〜ん 早く俺とぶへっ」

お人形さんありがとう。

ちやうど投げた人形が両手を突き出しながら迫ってくるそいつに

クリティカルヒットしたのだ。

そして思いっきりひっくり返ってしまったその腹を躊躇なく蹴る。

「あうあつ！…って何すんだよ愛しのマイハニーッ！」

そいつは懲りずにうめきながらも抱きついてきた。

「っ！この変態野郎！」

とっさに投げ飛ばす。

「その人形といい、これといいつ。今度変なことしたら、第二理科準備室に閉じ込めるぞ分かったかっ！」

ちなみに第二理科準備室は怖いということでも有名だ。

「それは嫌だつ。けどどんなにしたって俺のお前への愛だけは変わらねえよっあぶしっ」

次はわき腹にヒット。

そして床に転がっている人形を拾い、ゴミ箱に投げ入れる。

「あ　っ」

そいつが手を伸ばすも虚しく、それはすこつと音を立ててゴミ箱に入った。

ナイスシュート。

「うわあつ。せ、せつかく徹夜して作ったのにつ。あややんのバカーッ！」

「馬鹿はお前だろうがっ。こっちはあんたが作ったそのせいで迷惑したんだからねっ、葵っ！」

そして泣きかけのそいつ　北村葵の頭を殴った。

短い間動かなくなったが、しばらくして頭を上げた。

「…分かったよ。たくしょうがねえなあ。んじゃ、続きはまたということだ」

「続きなんて許さないんだから」

「まあまあ。怒るなっつ」

そして立ち上がってパンパンツつと埃を払った。

金髪にピアス。だらけた制服。

葵はにっこり笑って言った。

「それじゃ、部活に行こうぜ！」

……まったく。もう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1428f/>

memory x melody 四葉の奏でる幻想曲(ミステリー)

2010年10月28日00時52分発行